

第62回 全国社会教育研究大会 新潟大会に参加して R3 1 20
岡 昌子

コロナ禍の中、縮小しての大会になりましたが、大会関係者のご努力により何とか開催できましたことに感謝申し上げます。

事例発表は新潟市、燕市、糸魚川市、長岡市、村上市から発表があり、只々感心しながら聞かせて頂きました。中でも私の印象に残った、まちなかキャンパス長岡の「長岡の人が育つまちづくりを目指して」の事例は、人々の学びの裾野を広げた学びの原点から地域で活躍する人材へとステップアップの体系がとられており設立から約9年目の現在は、受講生がそこで得た学びを様々な方法で社会に還元できているとのことでした。社会環境の変化の中、自発的な市民活動に結びつく人材の育成を考える上でとても参考になりました。

シンポジウムは、聞きごたえのある、私にとってはとても重い内容のシンポジウムでした。後日、動画配信も見たのですが、何をどのようにまとめてよいか困り果てた末、登壇された4人の方のご意見を記述させて頂きました。

鈴木先生が冒頭に社会教育の「目的」と「内容」は変わりようがない。新しい社会教育とは中核の部分に戻ることで、周囲の状況を見ながらおたおたするのは良くない。しかし方法に関しては様々な方法があるのでそれを追求する。というメッセージで始まりました。社会教育委員会では、自分たちの町では何が必要かを考え、それに対してやらなければならないことを行政が考え予算付けをし、社会教育委員が後押しをする。しかし実際は予算もかけてないし、社会教育委員は何をすればよいかわからない。家庭教育、学校教育とは違い、社会教育はイメージしにくいこともあるが、それは全体がわからないところで動いている行政職員の問題でもある。全国社会教育委員連合が状況を把握し、どのような情報を提供し、委員に何を理解してもらおうのかをしていかなければならない。地域の全体を見ながら、他の人たちが学習をしやすくなるような環境を整えるのが社会教育委員の役割である。教育委員も社会教育の理解が必要であり、社会教育委員が教育委員にアドバイスできれば素晴らしい活動になる。

また、社会教育委員も今、何が起きているのか現場の人から内在的問題を引き出し、プラットフォームとして共有し、課題解決に導くマクロ的アドバイスを見える化していく。旧態依然では地域と分離してしまう。

全体を通しての感想は、私がいかに勉強不足であったか思い知らされました。寒くて震えながらの全国大会でしたが、有意義な学びの場になりました。

第 62 回全国社会教育研究大会新潟大会（2020 年 11 月 12 日 アオーレ長岡） 参加報告

（第 51 回関東甲信越静社会教育研究大会）（第 20 回新潟県社会教育研究大会）

2021 年 3 月 4 日 新潟市社会教育委員会議 報告（雲尾周）

ほぼ全委員が参加し報告も重なるので、2 点についてのみメモ報告します。

I. 10 時 40 分～12 時 40 分 事例発表に対する助言

1：新潟市「学校と地域の連携・協働～高校・公民館・地域住民のつながる活動～」個々の日常の本務から社会教育委員の活動へつなげる。提案の土壌づくりにどう取り組んでいくか。

2：燕市「食育活動から展開する家庭教育」社会教育委員の協働による必要課題の発掘と実践。家庭教育支援における講座型活動から支援チームへ。大分県親のまなびプログラム。

3：糸魚川市「地域の元気を引き出す社会教育～『西海地区地域づくりプラン』の活動理念と取組について～」地域全員参加の地域づくり。「人々の暮らしと社会の発展に貢献する持続可能な社会教育システムの構築に向けて 論点の整理」（平成 29 年 3 月 28 日）社会教育に期待される三つの役割①地域コミュニティの維持・活性化への貢献

4：長岡市まちなかキャンパス長岡室長 近藤 典子さん『『学び』と『交流』の拠点として—長岡の人が育つまちづくりを目指して—』新しい学びと交流のプラットフォーム。社会教育に期待される三つの役割③社会の変化に対応した学習機会の提供。「3 もの」の要素を市民に育成する。

5：村上市「ささえ隊・つながり隊・つくり隊—高齢者が活躍して障がい者が笑顔になるまち—」社会教育団体から広がる地域のネットワークと活躍の場。社会教育に期待される三つの役割②社会的包摂への寄与。だれ一人取り残さない地域づくり。

II. 13 時 40 分～14 時 50 分 シンポジウム「新しい社会教育をデザインする」

羽賀友信・まちなかキャンパス長岡学長

スライド 1 大会研究主題（副題）に合わせると ①つなぎ→多様性が出会うプラットフォーム ②はぐくみ→人材育成（多世代教育） ③響きあう→相乗効果でアクション	スライド 2 （詳しく）長岡では ① 協働条例 ・NPO 法人によるアオーレの運営（市民協働センター） ・協働型災害支援センター（チーム中越）
スライド 3 まちなかキャンパス長岡（生涯学べるまち）	

入口の人口を増やさなければ社会活動の壁が高くなる。入口を広くするためにカフェ。そこから高度人材へ育っていく。

スライド4

② 市民協働センター（NPO支援）

- ・人材が活躍できる仕組み
- ・情報が共有
- ・アクション支援（活動団体への助成）

スライド5（人材育成が先。場所だけ作ってもさびれる）

- ・多世代を分けて育成

→NPO 3世代 長岡方式

スーパーバイズ世代（相談）

中心世代（活動）

育成世代（学び世代）

※2世代だと高齢化で消滅してしまう

スライド6（家庭教育の課題が学校教育につながっていくが、そこをスムーズにつなぐ社会教育が必要。社会教育が学校教育を補完する。学校で理論を学び、社会で実践）

家庭教育・学校教育・社会教育の3つがスムーズな連携

スライド7（誰かがやっているからではなく、意識の高い人をどのように育成するか、どのように支えるか。手上げ方式ですすめられること）誰もやらなきゃ私がやる！！

真柄正幸 新潟市食育・花育センター長

変化に対応した社会教育

人と人のかかわりの希薄化への対応：教育委員、PTA、青少年団体等との懇談

公民館をはじめとする社会教育施設の活性化：住民のニーズにこたえられるように

バーチャル化：体験活動の必要性、生涯学習行政の推進、連携・協働の視点

鈴木真理 全国社会教育委員連合会長・青山学院大学コミュニティ人間科学部長

・『新時代の社会教育』（放送大学大学院教材 2015年3月）というものは書いたが、結局、新しくなく、元に戻る。

・社会教育のことなのか、周辺のことなのか、区分けして考えること。

・社会教育の目的、内容、方法を考える中で、新しい「方法」に行くのではないか。

【まとめの一言】羽賀：社会教育委員と周りの人が委員の仕事を理解すること。

真柄：変化する時代に必要なことを学ぶ。ユネスコで言われた自分の地域を知らない、共生しない状態で世界には出れない、ということを社会教育で進めなければならない。

鈴木：社会教育はいろんなやり方がある。何でもできることを強みに。

以上

12 出席して

DATE

社会教育委員
鉦川 博人

記念講演の女優・エッセイストの星野知子さんは
 会場にこのように残念であったが、映像で見ると本人は
 若々しく好感あふれる笑顔で会場を魅了した。演題
 の「当り前の幸せが響きあう社会」が今までの経
 験にうしろ打ちされてとておわかりやうい講演であ
 った。2月末に出演した司馬遼太郎の園子とポピン
 さんと最後の今までほとんど仕事がないこと、司
 馬遼太郎の「峠」の主人公の母が「峠」の主人公が
 今までよく読んでいたこと、この主人公が
 長岡を存して維新政府に勤王を志すこと、
 19才の頃、パリのアート・ナター美術館へ行って
 絵画の作り方を学んで、そこで遠足に来ていたとい
 う小学生の頃の思い出が奔放な子に日本と
 フランスの文化の違いを感じたこと、ピカソ
 美術館で目の見えないう人達が、ピカソの創った本
 物の彫刻に実際に手で触って立体を感じていたこと
 と感動したこと、10才を過ぎて習字を始める漢
 字の書き順が今までのいかに間違っていたかを感
 じ、かな文字のくろし字が読めないうに存したこと
 等々、笑って興味深く分かってもらうことができた。
 社会教育(研究)というといかめしい言葉が次々
 と現れ、このイメージのあふれる、この工場の
 社会教育の原動力は「好奇心」「学習意欲」とこの
 ように分かってもらう納得に至る言葉で表現して星
 野さんに感服した。最後に今の工場の禍を述べ
 ていながら自分も今までの当り前の幸せを多く保つ
 ていながら(長岡にいてとて)これまでに響
 きあうこととしていながら反省をふりかえり
 くの人たちと伝え、つなげていこうとの結
 びのた。

あとには残り少ないが新潟市の角野仁美さん、燕
 市の神保一江さん、新潟市の古畑伸一さん、長
 岡市の近藤典子さんのことと雲屋岡氏のた

3各事例の社名と助言があつた。これとどの事例は
 地球にわたる活動が報告された今後の社会教育活動
 への期待を充分にわかつた。これと内容であつた。その
 とおなじみのわけは各ととおなじみのことである。
 提言も今後の多様な価値観やエロ干後の活動を思ひ
 立ち有意義なものである。羽賀友徳氏は「つくり
 ・つくす・つくる」をキーワードとして、
 この視点が「規律」に提言され、真柄正幸氏は「変化
 に対応した社会教育を實現する」は、今の人々との
 の関わりを希薄化を解消し、施設の活性化や講座等
 の「一歩」化を促進させ、おぼろげと理解し
 のうえで世界のことも考えよう」と提言され、鈴木
 直樹氏は「新しい社会教育のつくりかた」として
 難なこと」として話され、この中で目録や内容は
 変わらぬが方法はそのつと変えてもかまぬ、極端
 なことを言ふは何としてやむを得なくてよい
 ねと、昔はそれとていふこと、これとていふこと、
 り社会教育は必要のない存在と刺激線な橋樑も
 あり大変苦界はなつた。イーデン・ネーサーの山田智之
 さん社会教育の理論と展開と、小愛のちり
 物にして目録のIPとを作者の力でなく、米一つ
 つぶが個性ある存在で状況に応じて、おぼろげに
 なければおかげに存在するといふ可能性を、
 見ると一歩ずつあつた意見を、大いに納得した
 のだ。

かねてかえり、星野知子さんの来場できなかったこと
 とを残念と思つた反面、エロが全国大会の縮小版では
 あつた今大会ではあつた。今後の社会教育を考えると
 今後の参事とつたり、いやがらぬに期待をいふか
 といふは、新野長国大会であつたと思つた。

大会参加報告

社会教育委員 出頭久美子（新潟市立南浜小学校）

大会名	第62回全記憶社会教育研究大会 新潟大会 第51回関東甲信越静社会教育研究大会 第20回新潟県社会教育研究大会 長岡大会
開催日時	令和2年11月12日（木）9時30分～16時40分
会場	シティホールプラザ「アオーレ長岡」（長岡市大手通1-4-10）
大会スローガン	未来につなぐ「米百俵」 ～フェニックスの地ではじまるこれからの社会教育～
研究主題	新しい社会教育をデザインする ～つなぎ はぐくみ 響きあう 生涯学習社会の実現～
所感等	<p>1 事例発表を聴いて 地域に於いて、どんな土壌があるかを知り、地域の方が活動しやすいように環境を整えたり考えたりすることが社会教育委員としての役割の一つではないか。社会教育委員の協働により、地域の課題が解決されていく。広く地域の方々の考えや思いを知る工夫をし、地域コミュニティの活性化に貢献できる存在。</p> <p>2 シンポジウム ＜シンポジスト＞ 鈴木真理氏（青山学院大学教授・全国社会教育委員連合会長） 真柄正幸氏（新潟市食育・花いくセンター長） 羽賀友信氏（まちなかキャンパス長岡 学長） ＜コーディネーター＞ 山田智之氏（新潟県社会教育委員連絡協議会会長・上教大教授） 大変聴き応えのあるシンポジウムであった。 社会教育の強みを自覚し、責任をもって自分たちで考え、様々なことに取り組んでいくことが大切だと感じた。</p> <p>3 記念講演 演題「当たり前前の幸せが響き合う社会」 講師 星野知子氏（女優・エッセイスト） 社会教育は、世の中と自分がかかわっていくためにある。どんなちっぽけな学習意欲でも、制限されてはいけない。 社会教育委員は、日々の当たり前前の幸せを響かせるために存在している。 心に残った言葉である。人はいくつになっても学びたいし、想像力を広げて楽しむ人生を送りたいのだと強く感じた。</p>

11月12日新潟アルビレックスBBのホームである「アオーレ長岡」で開催された。広大な会場に、無数の机が配置され、1机1名の使用と場内の換気でコロナ感染症対策は万全であり主催者の並々ならぬ意気込みを感じました。

第1分科会 学校との関わり～学校を核とした社会教育による地域づくり～

【事例発表1】新潟市「高校生が主役の地域での学び～学校を書くにした社会教育による地域づくり～」では、我が新潟市の角野社会教育委員の発表です。

新潟市教育ビジョンによる明確な教育の方向性とコミュニティ・コーディネーター養成講座による若者による地域活動実践者育成が丁寧に説明され、白根地区公民館の実践が具体的に発表されました。白根高校の生徒の生き生きとした活動の様子が想像できました。白根高校の実践が全国に発信されたことになり益々の活動が期待されます。当日は白根地区公民館の方も視聴にいらしていました。

第2分科会 家庭との関わり～地域のつながりによる家庭教育支援：親も地域の一員～

【事例発表2】燕市「食育活動から展開する家庭教育」サークルきらら神保一江氏の発表です。

燕市社会教育委員10名の自主活動として月1回実施している内容でした。家庭教育支援活動として「らんらんランチ会」の活動が発表されました。新潟県発行の「家庭教育支援ガイドブック」の活用、家庭教育支援チーム登録でさらに活動域を広げたこと。新たな課題としてメディアコントロールについて研鑽中であるなど、社会教育委員が直接、市民の中に入って積極的に活動している様子がうかがえました。

第3分科会 地域との関わり～地域の元気を引き出す社会教育～

【事例発表3】糸魚川市「地域の元気を引き出す社会教育」～西海地区地域づくりプランの活動理念と取組について～ 西海地区公民館長古畑伸一氏の発表です。

地区行事の参加者減少（特に若者と女性）等の解決のため立ち上げた「西海地域づくりプラン」、活動内容が紹介されました。「全体交流班」「女性交流班」「若者交流班」など交流に視点を置いた様々な活動が紹介されました。また、事業の見直しを住民アンケートにて行うなど地域住民のニーズを重視しているそうです。課題はスタッフの高齢化と負担増で、若者と女性の参画を推し進めているそうです。また、自主財源確保が急務の課題となっています。

第4分科会 社会教育施設等との関わり～魅力ある地域づくりのプラットフォーム～

【事例発表4】長岡市「学びと交流の拠点として一長岡の人が育つまちづくりを目指して」長岡市まちなかキャンパス長岡室長近藤典子氏の発表です。

米百票の精神のもと中越大地震の復興、防災性と利便性の高い市街地づくりを平成18年3月の計画策定から始まり十分な検討を重ね平成23年9月に「まちなかキャンパス長岡」オープンに至る説明がありました。立地場所も良く、まちなかカフェから、まちづくり市民研究所まで多彩な講座とステップアップ体系と学んだ成果を還元できる仕組みがあることなどとても整っていて羨ましく思いました。

第5分科会 人と人とのつながり～地域の人をつなぐ社会教育・社会活動～

【事例発表5】村上市「ささえ隊・つながり隊・つくり隊」高齢者が活躍して障害者が笑顔になるまち村上市総合地域スポーツクラブNPO法人きらら 理事長 渡邊優子氏の発表です。

村上市の広域合併前に勤務していたこともありとても興味を持って発表を聞きました。高齢化率の高い地域で「ささえ隊」の活動はとてもよいプログラムと思えました。たいへん地域が広く地域総合型スポーツクラブが5つもあつこと、「ささえ隊」スタッフのスキル向上に乗じて高齢者の活躍するビジネスに飛躍できないかという考えはとても素晴らしいと思えました。

発表後は雲尾先生から発表事例それぞれに社会教育委員としてどんな関わりがあったのかという視点での助言がありました。自分も新潟市の社会教育委員として市内の社会教育活動にかかわっていかなければならないなと思えました。

第 62 回全国社会教育研究大会新潟大会参加報告

新潟市社会教育委員 山田久美子

日時：令和2年 11 月 12 日（木）10 時～16 時 40 分 会場：「アオーレ長岡」

【主な内容】

大会スローガン：未来につなぐ「米百俵」～フェニックスの地ではじまるこれからの社会教育～
研究主題：「まちづくりにおける社会教育の役割」

1. 事例発表

新潟市「高校生が主役の地域での学び～学校を核にした社会教育による地域づくり」

燕市「食育活動から展開する家庭教育」

糸魚川市「地域の元気を引き出す社会教育」～「西海地区地域づくりプラン」の活動理念と取組について～

長岡市「「学び」と「交流」の拠点として—長岡の人が育つまちづくりを目指して—」

村上市「ささえ隊・つながり隊・つくり隊」—高齢者が活躍して障がい者が笑顔になるまち—

コーディネーター：県生セ所長 櫻井和宏氏 助言者：新大大学院准教授 雲尾周氏

2. シンポジウム

新しい社会教育をデザインする～つなぎ はぐくみ 響きあう 生涯学習社会の実現～

シンポジスト：全国社教委連会長 鈴木真理氏 食花センター長 真柄正幸氏 まちキャン長岡学長 羽賀友信氏 コーディネーター：県社教委連会長 山田智之氏

3. 記念講演 「当たり前前の幸せが響きあう社会」 星野知子氏

【印象に残ったこと等】

・鈴木会長があいさつの中で述べられた「社会教育委員ご飯論」。ご飯はその用途に応じて、ご飯、お握り、おかゆなど様々に形を変え人のニーズにこたえるだけでなく、おかずを結び付けるなど、いろいろな役割があり、生活に欠くことができないものだ。社会教育委員もご飯のような存在になっていきたいものだ。

・シンポジウムで羽賀氏からアオーレ長岡の理念や活動方針について提言があった中で、長岡方式とも言われた NPO の育成方針。NPO を世代ごとの役割に分けて育成する考え方で、学びの必要な若い世代「育成世代」、活動の中心となる熟年世代「中止世代」、彼らの相談に乗りアドバイスができる「スーパーバイズ」の 3 世代の NPO を育成し市民協働の柱としていく。「誰もやらなきゃ私がやる、という人をどう育成し、そういう人をどう支えるのか」という言葉が印象的。長岡市の事例発表と合わせて振り返ると、長岡市では社会教育と地域の人材育成を、行政上きっちり分けて考えているのかなと感じた。

・新時代の社会教育とテーマに関して、シンポジウムの鈴木会長の指摘。社会教育の本質的なところは昔と変わっていないはずで、行政が行う社会教育は変わりようがないのではないか。社会教育そのものの事柄か、周辺の事柄かを区別して考えなければならない。社会教育の目的は何か、内容は、方法は…求められるならそここのところの新しさ。

・コロナ禍の下での大規模な集会ということで、さまざまな感染防止対策。検温、除菌、ソーシャルディスタンス…。しかし換気のためか室温が低く、参加者自身が十分な防寒対策をとることが、新しい生活様式の一つなのか。